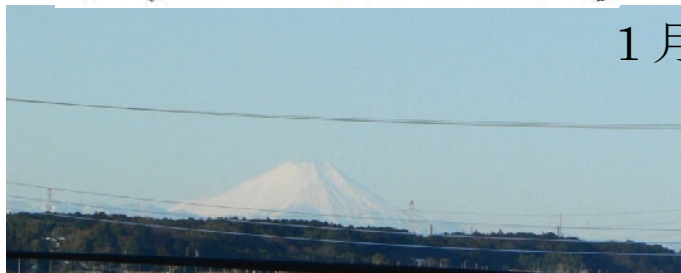


白金霞

1月号



平成30年一月発行 第83号

定例会句会（毎月第三金曜日 アビスタ会議室）

二月十六日（金） 正午～三時第五兼題…針供養、黄梅

三月十六日（金） 正午～三時第三兼題…鷹化して鳩なる、春

四月二十日（金） 正午～三時第三兼題…未定

兼題句参考句二月十六日分 針供養、黄梅

あじきなき日を送りつゝ針供養

高橋淡路女

天井に日の斑ゆらめく針供養

桂信子

針供養にも夕影といへるもの

深見けん二

黄梅や堰越すときの水ひかり

河野南畦

黄梅の影石に在り土に在り

依光陽子

雨けぶる西湖蘇堤の迎春花

石原八束

月例会句会報（¹⁸／1／19 10名欠3 新年一般

光成高志

輪飾やEMバケツ置く戸口

紅白歌合戦佐渡の荒海丘みどり

将門の井戸に社に初詣

満月の残る三日の日の出哉

膝までの辞儀して御慶申しけり

仲本興正

初旅のバス全面に富士ひとつ

喧嘩にも初を冠して江戸っ子は

デイズニーの筆よりこぼれ嫁が君

一張羅でしかと啼きたる初鴉

裏白に日の当たりたる昼餉時

増田陽一

寒満月見て動くなり窓の蠅

ベランダに妻来て十二月まで咲けり

深海の燐光なして煮凝れる

蒟蒻を煮て足りるなり年の酒

偷み来し冬薔薇ほどの暖かさ

松村幸一

永らへて元日といふお年玉

撮るだけの舞妓との縁お正月

羽子板の思ひ深げの豆絞り

胃ろうの妻よ今年はダヤモンド婚

姫始なかりしごとく割烹着

光 みち

どんど場の要に浄め塩を撒く

飯田孝三

神棚のタイの仏も煤払ふ
南へ野川の伸びる初景色
雉発つて驚かさるゝ初詣
歯固めのするめの足をひとつづつ
札者の子成績表を携へて

吉羽多美子

目隠しがきついとぐづる福笑ひ
初場所の一転綱の崖ッ縁
これやこの爺の大吉祥神籤
初鳩や西郷どん胸張る像の丈
手のひらの皺をつくづく初日向

倉田紀子

年の瀬や女子会と云ひ老ひ集ひ
朝酒を酌み合ひ老ひの三ケ日
格子戸の漢方薬屋鏡餅
七種粥炊く背に母の割烹着
参道に神説く牧師初不動

佐藤宏之助

傷いゑし背をなぞりゐる初鏡
ひとり居にバラード聴くや三日暮れ
繭玉の金三両の重さかな
座にひとり雪女郎かや句に遊ぶ
バンドネオン 瞼まなぶたに降る冬銀河

浅野正美

二十戸の村に育ちて注連貫ひ
手車に載せて解体大鮪
懷妊を事務服に秘め初写真
初みくじ大師の杖に花結び

初詣願ひは同じ手をあはす
初日の出広がる茜鳩が飛ぶ
初場所や力士呼ぶ声沸き上がる
福詣背広姿の後につく

寒椿枝移りする目白かな

武者昭七

初詣蠟燭の灯のゆらぎをり

一句鑑賞

光成高志

幾つかの病魔抱へて新春^{はる}迎ふ

雪積むや演歌漏れくる軒の先

寒鴉啼き交しつ歳暮れぬ

振り仰ぐ空一面の冬の星

寒椿散り敷く坂を登り切る

磯目健二

わが余命ふとよぎるなり賀状書く

遠霞沼ひろびろと初明り

蠟梅の香りゆかしき松納め

寒鮎の釣懐かしみ炬燵かな

寒鮎や涅槃の如く水底に

田宮敦子

初詣親の真似して鈴鳴らす

元旦や富士のお山は雲の中

お正月迎えの祖父に飛びつく子

年新誓い読む子の声強し

目隠しがきついとぐづる福笑ひ

孝三

源氏物語に、冷泉帝が帝という公の地位を去って、好きなように過ごしたいとずっとお考えになり、ぐづぐづ仰せにもなっていられましたが、体調を崩されたことをきっかけにして急に退位されたという一節があります。目鼻口が珍妙な顔に仕上がり座が笑いに興じる日本の伝統的な遊び、それよりも目隠しがきつくて目ん玉が圧迫されるのはいやだと愚図っている子の心理と本質の所は同じですね。今の平成の世にも通底していると思いましたが如何ならんです。

南へ野川の伸びる初景色

みち

元日のめでたい気分の中にあて、いつも見馴れている南へ伸びる野川も新鮮に見えて来てこれがあゝ初景色ですという句。こういう作者の感覚を私は邪魔しないように生活しております。

振り仰ぐ空一面の冬の星

昭七

冬の夜の満天の星を振り仰いだという内容の句になっているので、素直に、「冬の夜の満天の星振り仰ぐ」と書けばいいでしょう。星は見る他はないので、上五は省略

できますし、省略すべきです。従つて下五で作者の場所とか思いとかを具象化して切ればいいでしょう。私の「満天の星を戴き富士登る」のような有難みの気持を付けるとか、ここは仰ぐのではなく満天の星を一個の人間がかぶっているとするれば、宇宙感覚が表現できます。「ふりかぶる」が適切ですね。

撮るだけの舞妓との縁お正月

幸一

京都の祇園通りなどを歩いているとこういう光景が見かけられる。お正月という季語も軽妙に書いてあつてこれもめでたい現代の正月風景であります。

裏白に日の当たりたる昼餉時

興正

裏白はすぐ乾燥して捲れてくるが、それにお構いなく日が当たっている昼餉時の情景である。ふと目に入つた鏡餅に敷かれた裏白でしょう。静かな正月を過ごす家の佇まいとか、あるいは賑やかな一家の居間の佇まいが省略されています。

一句鑑賞

磯目健二

年の瀬や女子会と云ひ老い集ひ

多美子

もはや中性というべき老女達が女子会と称して忘年会を開く。とまれ女子会を羊頭狗肉と苦笑する男性よ、それは僻目と知るべきだ。試みにその女子会を覗くなら花を添う粉黛、グラマラス、キュートで臍つけた妖美の

老女達が醸す華麗さと活力溢れる賑やかさに圧倒され、女性性は死ぬまで女性であるという神代からの真理を痛感するに違いない。

座にひとり雪女郎かや句に遊ぶ

紀子

雪女郎は北国では恐れられる幻想の異質の存在だ。ひとり句会でそんな立ち位置に居るのではという疑念を抱きながら参加している。しかしいったん運座が始まれば、そんな孤立の自意識から解放され作句三昧に浸っている自分が居る。それぞれの異質を前提に作る俳句では、雪女郎的存在はむしろ必要不可欠なのではあるまいか。

寒満月見て動くなり窓の蠅

陽一

冴え冴えとした寒の大きな月が窓にあり、その窓硝子を微かに動く物がある。目を凝らすと一匹の冬の蠅だった。それはまるで月面を這っているように見えた。遙かなる距離感と巨大と極小が無化し同列に。その錯覚が季節感を髪髯とさせる句を産んだ。

蒟蒻を煮て足りるなり年の酒

陽一

妻しをらば心づくしの佳肴で酒が飲めるだろうが、今はその妻はこの世にいない。蒟蒻なら不器用な自分にも煮ることが可能。美味しい酒と蒟蒻があれば、ほかに何が必要だろう。なにやら佐藤春夫の「秋刀魚の歌」に通じる哀愁だが、さらにこの句には深い諦観とその果ての自

足の思いが流れている。

ベランダに妻来て十二月まで咲けり

陽一

高層住宅のベランダに生前の妻が遺した、植木鉢の数々。その一つが新たに花をつけ年の瀬まで咲き続けた。早逝の愛人が花に化身して訪れるという物語が世上にある。寒風にもめげずに咲く花の姿に、在りし日の亡妻の姿と心根が重なって思い出される。相聞歌というべき哀憐の情の溢れる佳句。

深海の燐光なして煮凝れる

陽一

海底の暗闇に燃える燐光は深海魚の発するいわば誘蛾灯。その燐光の残映を煮凝りに認めるや思わず喉が鳴る。たとえ地上で煮られても深海魚が海底で餌を誘引する如く人間の食欲に働きかけてくる面白さ。事実、寒の煮凝りは実に美味いのだ。

懷妊を事務服に秘め初写真

宏之助

仕事始めの職場の点景。写真の人物が既婚女性なら、彼女のみ知る喜ばしい秘密である。だがもし不倫の結実を身に抱えてしまった未婚女性なら、憂い深き秘密ということになる。初写真なれば、清々しい笑みを浮かべる新妻の祝福すべき秘密と解したい。

永らへて元日といふお年玉

幸一

もはやフルコースを存分に生き抜いた。この元日から

は人生のデザートを思うまま賞味するぞというポジティブな老いの気概が頼もしい。死への一里塚と元日をとらえる無常觀的思考の対極だ。

一句鑑賞

増田陽一

将門の井戸に社に初詣

高志

最強の武士として関東一円を治めたが、後に常陸國府を襲撃し瀬戸内の純友と共に国家反逆の名を着せられた将門、よく怨霊ともなったけれど、ファンも多い。この地で将門を言うのは地方的特色があつて地靈に因む主題は俳句の力である。ここは「井戸に」歴史があつて社は後の付けたりと、地元作家の特色ある句ではないか。東北の俳人がアルテイを言うのにも似ている。

南へ野川の伸びる初景色

みち

初景色というと人情的光景が出てきがちであるけれど、この純粹、簡明な彫刻的風景は良い。単純なばかりではなく、仮に南を東や、また西方になどと置き換えてみると妙な意味づけが出来ていずれも頂けない。「野川」が「大河」となっても困るのである。掲句には風土を背景にストイックな美しさがある。

胃ろうの妻よ今年はダイヤモンド婚

幸一

この句を僕は解説することは出来ない。涙のほうが先だつてしまうのである。「ダイヤモンド」という硬質の響

きと背後の年月への思いだけが救いであろう。さて次の一句に言及しないと片手落ちになると思う。

姫始なかりしごとく割烹着

幸一

ここに過ぎし時代の情緒たつぷり、「なかりしごとく」が微笑を誘う。「割烹着」に昭和までの家庭婦人のつつましさをが見える。(それ故の色気も、か。)

バンドネオン瞭に降る冬銀河

紀子

アルゼンチンタンゴらしい曲が聞え、見上げた目には鮮やかな冬銀河。ロマンチックな異国情緒のひとつである。「瞭に降る」が印象的。

わが余命ふとよぎるなり賀状書く

健二

旧知から喪中はがきも来尽くした歳末、枚数も減った賀状を書いている。我は猶生存す、諸賢も存えよと。若い者には判るまいが感慨をこめて書く。

寒椿散り敷く坂を登り切る

昭七

椿の多い海沿いの山坂か、危ぶんでいた急坂を「よく登り切ったものだ」という感慨が眼目である。鎌倉あたりか、と虚子のよく詠んだ散り椿の路を連想する。

手のひらの皺をつくづく初日向

孝三

啄木の「じつと手を見る」ではないけれど、小生などは手が荒れて皸、皸の嘆きであります。ここでは「つくづく」の語に皸だけでない半生の哀歎と「日向」の安ら

ぎが見えます。

一句鑑賞

飯田孝三

姫始なかりしごとく割烹着

幸一

新世帯の頃の回想だろうか。正月三日、厨に立つ主婦然たる立居を目にして口をついた、ほのぼのと軽妙、洒脱な二人称吟。

ベランダに妻来て十二月まで咲けり

陽一

ふと見るとベランダの小鉢に秋草の芽吹き、それに水をやるのが日課となった。みるみる蕾をつけ、花開き、とうとう十二月いっぱい迄も咲き続けたのである。その秋の花は一年半前に亡くされたご夫人悦子さんの生れ代りに違いない、陽一さんはそう思いつづけておられる。

膝までの辞儀して御慶申しけり

高志

礼者の子成績表を携へて

みち

二句ともに日頃離れ住むお孫さんたちの新年来賀の図かつてお二人が睨けられた行いそのままのほほ笑ましい光景である。お二人目を細め、さあさあお上がりお上がり(前句)。障子破つて帰ったばかりと思っていた上のお子さんはもう小学生、揚々、成績表を手にしてのお出まし。きつと上々の出来栄えだったに違いない。思いきりお年玉を弾んだことでしょう。

喧嘩にも初を冠して江戸っ子は

興正

火事と喧嘩は江戸っ子の華。俳諧は庶民文芸の面目躍如、江戸っ子気質丸取りの句。口誦の弾みがいのちの句、詠み口はそれぞれだが、「初」を「はじめ」と読ませて、中七「て」を省き、「冠し」とするのも一興だろうか。

懷妊を事務服に秘め初写真

宏之助

地球の年令は女性が支えるとは、隣国の諺だが、この頃のご婦人方を見るとそれどころではない。男たちにおい若者よしつかりしろと声かけたくなることも。われら昭和一桁生れ、つい「懷妊」を「事務服」の後にもっていきたくなるが、「秘め」といいながら「どかと冒頭におくあたり、巧まぬ平成の世相諷刺か。

一句鑑賞

武者昭七

これやこの爺の大吉初神籤

孝三

「これやこの」は驚きと喜びの表現。たまたま引いたお神籤に「大吉」とでたのだ。みずから「爺」と称するとおりの先たいした余得もあるまいとたかをくくっていただけにこれにはびっくり。思わず「いやいやなんと大吉だそうだ。おどろいたねえ。」そんな雰囲気が伝わってくる。それが明るく軽快なリズムに踊っている。

初詣蠟燭の灯のゆらぎをり

敦子

杉木立の奥深い本殿にともるお灯明だろう。蠟燭の灯のゆらめきは神の降臨のしるしだ。作者はじつとそれに目をそそぐ。神と人とが一つになる瞬間だ。焦点を灯明の揺らめきの一点に絞ったので社を包む闇の暗さも出た。わが余命ふとよぎるなり賀状書く

健二

年々受け取る賀状も差し出す賀状も少なくなっていく。自分が出せなくなる日もそんなに遠いことではないという思いが胸をかすめる。届いた賀状よりもいつの間にか途絶えてしまった賀状の主がおもわれるのもそんな時だ。深海の燐光なして煮凝れる

陽一

厨房の一角から差し込んでくる一条のあわい燐光。それが卓上の煮凝りの鈍い反射を浮かびあがらせている。一瞬、厨房は深海の底に変貌する。深海の燐光浴びて鈍く光る煮凝り。煮凝りは今おのれのまことの居場所をえたのである。

俳窓評論纂

* 1.8の朝日俳壇歌壇に俳壇賞の句が載った。34回を数える。驚く勿れ、自然詠は皆無に近い。私が見たところ、40句40首計80の句首の内僅かに3つがそれらしいだけ。月渡る白神嶺々や除夜の鐘、雲流れゆく大雪野果つるま

で、日めくりの暦もわずか富士の雪宝永山の裾まで降りぬ、以上。他のものは皆人事詠、人がどうしたこうしたという人情を詠っている。私の感覚がおかしくなつてしまつたのか。荒海や佐渡によこたふ天河、とか、一輪の花となりたる揚花火、とか、清滝や波に散込む青松葉、初空や藍と茜の満たしあふ、のような心の澄んだ句は見当たらない。因みに平成元年の朝日俳壇の選句欄を当つてみたら、自然詠は40句内10句は在つた。今は10%未満、30年前は20%台ということ。誓子先生の影響を選者衆も受けていたのではなからうか。それよりもここ30年の間に地震・原発事故などの天災人災に見舞われた日本人の心を表現したくなつたのかも知れない。

* 1.9ひと欄に富士山字を究める世界遺産センターの初代館長遠山敦子さん（79）の紹介が載つた。富士宮市にある。新年も三が日に約一万六千人が観覧した。中学一年から静岡市より毎日富士山を望んだ。屹立した富士山を手本に生きようと思つた。今の世界遺産になつたのもこの人の取り組みに負う。隙間があると山中湖の別荘に夫と出かけ富士山を眺める。「今や富士山は世界の宝。その宝の意味をずっと伝えていきたい」と。富士市に移住され先に富士山百句を上梓されたひろし先生を即思つた。私も遠富士を見える時に見て敦子さんと同じ思いを抱い

ております。

* 異論のススメ欄（1.12）に佐伯啓思氏の異論が載つた。明治維新百五十年である今年（二〇一八）に今思う事を起稿するように頼まれたらしい。西郷どんをまたNHKが取り上げたことも動機になつたようだ。論旨は小林秀雄が疾に言つていたこと、私もそう思つて前号に一寸コメントしたことだ。昭和二〇年の敗戦が前半と後半を分ける中間に位置する。前半は明治からの近代化、戦後は第二の近代化であるとか。福沢諭吉や漱石が唱えていた不羈独立の精神、つまり「一身独立、一国独立」である。

日本の近代化は同時に日本の西洋化である。これでは日本は溶けてなくなる。戦後の近代化はアメリカ化であつた。福沢の後継の「新・文明論之概略」は出て来ないのが現状だと嘆く。近代化の宿命的矛盾をわれわれもどこかで気に掛けているから西郷が出てくるのではないかと結んでいる。（氏は先に自死された西部邁氏の教を子らしい。）

* 天幕に風の大波ほほづき市

菊の酒陶淵明も宿六も

逮夜経切目され目にちちろ虫

寒垢離僧猷のごとき声発す

揺れ揺るはニンフの宴糸桜

うたた寝の我に鈴振る月鈴子

風孕む戸口に立てし補注網

袋掛莫座の絵本を風捲る

農昼餉莫座の蟻にもごはん粒

大とんど火の粉リゲルを掠めたり

オラウータン二日も常のドンゴロス

向日葵の種挽ぐ幾何学模様挽ぐ

大根摺る賢治の国は青き国

初午の供物へ鴉勘左衛門

飛花落花遠流絵島の部屋にまで

四時起きの星燦々と露の宿

春蘭の蕾めり土に叩頭し

今朝生れし目高目だけが泳ぎをる

向日葵を壺いっぱいに癌病院

これで木村貞恵さんの「山川草木」を全部読んだ。後ろの「富士の国から」も読んだ。涙が自然に出て来た。

「蓬餅」の文章、私が子供の頃蓬を摘んでいる母の背に云々という所、その情景をはっきりとした映像として今も消えることがありません、と書いてある。私もまったく同じ情景を未だにはつきり覚えていて。何故か季語にまつわる過去の記憶は消えないのです。これを読んでここまで打込んだ時、みちさんが帰ってきて、驚いたあーという。毎週通っている体操クラブの仲間で、親しい友

であるMさんと新年会で同席し、向うから見せたい句集が手元にあるのだけれど、持ってくるのを忘れた、という人かと言うと、最近亡くなられた貞ちゃんという人の句集である。読んで泣けて泣けてどうしようもなかった。みちさんが俳句をやっているの、見て貰おうと思っていたのよと言われた。即座にそれは木村貞恵さんのことでしょうと言った。なんで知っているのよと言うので、かくかくしかじかと話したというのだ。俳句は上に抜いたが、文章もいい。素直な文章であり、気取っていない。雨が降ったら雨が降ったと書けばいいをそのままにいった文章です。貞恵さんが私らと同じ年であることから親しみが湧いていた矢先にこういうご縁がありました。みちさんはまだ色々私に言ったがそれは一々ここには書かない。このご縁はひろし先生のお陰であります。

受贈誌（平成30年1月号）

結ばれて朱の字綾なす初みくじ（彩138号）平野ひろし

火の山の無明寒星煌けり（〃）

荒海の微塵となりて冬の虹（〃）

赤まんま休耕田は花畑（〃）

手筒花火黒き傀儡が火の粉浴び（〃）

ハローウィーン。バン屋の一段南瓜。パン（〃）

木村トミエ

窪田かつ江

佐藤恵子

羅の座れりバスの向ひ席(〃)

稻架嶮八海山の峰に雪(〃)

曼珠沙華蕊震はせて黒揚羽(〃)

秋の風ただ海だけが見えるカフエ(〃)

水に触れ水に映りてあきつ飛ぶ(〃)

砦跡堀の途切れ枯芒(東京ク1月)

石炭の匂ひの記憶初湯かな(〃)

一瞬の富士見逃さず発電車(〃)

掛飾舳先になびく出航船(〃)

乱雑に袋詰めされ札納(〃)

城跡をめぐる空堀枯芒(〃)

初紅葉磴の三百あと少し(あすか二月)

こだま

踏切を渡る左右に曼珠沙華(彩138号)

木曾谷や稲架に小蓑の青シート(〃)

山尾かづひろ吟行ノート(H301.7)

絵馬馬の腹ほど膨れ初詣

梅檀の一本倒す初仕事

初詣列一町二町どこまでも

鳥捕りの孤独「銀河鉄道の夜 八」から

武者昭七

平山三郎

〃

河端不二子

清野かつ江

〃

万世遊

璃子

理佳江

文男

守啓

〃

山尾かづひろ

光成高志

〃

飯田孝三

光 みち

光成高志

銀河鉄道の中でカムパネルラとジョバンニは背中のか

がんだ赤ひげの不思議な老人に出会います。(髭や髪が赤

いのは異界の人のしるしです。)老人は天の川の河原にやつ

てくる鶴や雁や鷺やらの渡り鳥をとらえて押し葉にして

売つては暮らしをたてているのです。もちろん二人には

そんな魔法みたいなことは信じられません。だから「鷺

を押し葉にするんですか。標本ですか」と聞き返します。

すると老人はきつぱりと答えます。「標本じゃありません

みんなたべるじゃありませんか。」老人はいまとつてきた

ばかりだと言つてふたりのめのまに鷺の見本をとりだ

して食べてみるようにすすめます。食べてみるとなんと

それはチョコレートのようにおいしい御菓子なのです。

ジョバンニはそれでも信じられません。この男はどこか

そこらの野原の菓子屋だ。ふたりをだましているのだと

男をばかにします。かたわらにいたカンパネルラがどう

とうおもいきつたというように声をあげました。「こいつ

は鳥じゃない。ただの御菓子でしょう」それを聞くと鳥

捕りの男はあわてた様子で列車をおりていってしまいま

した。この話はどう読んだらいいのでしょうか。「銀河鉄道

の夜」のなかの気軽な滑稽談と読めないこともありませ

んがそれだけではないように思えます。鳥捕りの言い放

った「みんなたべる」という言葉のなんと衝撃的なこと。

それが「生身のいきもの」だという事実を目の前に突きつけられながらなお「お菓子だ」といいはる偽善と傲岸さそれを賢治はいいたいのでしょう。ぼくらは毎日のようにそれがぼくらと同じ生き物だということを忘れて、あるいは知らぬふりをして他の生き物の「いのち」をおいしい、おいしいと喜んで口に出しているのです。身を捨てて友を救ったカンパネラにしてそうなのです。生きるために生き物どうしが他人のいのちを奪いあわねばならぬ悲劇からどうすれば抜け出せるのか。賢治にとってそれは最大の関心事だったのです。

芭蕉のかるみ以後（39）

光成高志

黒鯛くろしおとく女が乳

蕉

前に美人を持ってきたので、こちらはお徳女という海女の豊満な乳房を付けた。芭蕉のよく世間を知った付句である。黒鯛はクロダイと読ませている。ちぬではない。くろしの枕詞のように置かれている。これでおとく女が海女だとわかる。「嘲り」を受けているから醜女を嘲ったという解釈に走りやすいが、浮世は様々であって美しいものがあれば醜いものもある、それが人生というもの、浮世というものということである。歴史上の敗者に寄せる芭蕉の思いに通じらると思う。

枯藻髪栄螺の角を巻折らん

角

前句の醜女を海女と見て、その赤茶けた枯藻なす長髪が栄螺の角に絡み巻きついてそれを折ろうとするだろうという。これも基角の幻想である。高藤武馬氏はこれをブレークの絵にもありそうな幻視的な神秘感があると書かれている。ブレークは陽一さんが詳しいと思いますが、如何でしょう。芭蕉より百年後に出たイギリスの詩人画家銅版画家であり、日本には柳宗悦が紹介、大江健三郎が傾倒した。先の倫敦五輪でエルサレムという作品が歌われた。

魔神を使トス荒海の埼

蕉

前句はブレークの幻視ではなく、日本の其角の幻想であるから、芭蕉は日本の古事記をもつて付けた。本居宣長の古事記伝以前でも読まれていたのだ。一番近いのは寛永二十一年版である。その大國主の国ゆづりの項に出てくる。天照大御神の使者として建御雷神けみかづちが「出雲の稲佐浜の小浜に降りたり到りて、十掬あぐみ掬あぐみを抜きて、逆ささかに浪の穂に刺し立て、その劔の前さきに跌あぐみみ坐ままして、其の大國主神に問ひて言ひたまはく」の場面を付けた。魔神は建御雷神を指している。荒海の埼は栄螺の角を巻き折る程の戦いの場面にふさわしくするため小浜を変えたのだ。前句の其角の醜女は先に亡くなった伊邪那美を指していると思う。黄泉平坂まで夫の伊邪那岐を髪を振り乱しながら追っつけた神話から基角の想像力で作った句ではなからうか。それに対して芭蕉は古事記の神話

をまともに受けて換骨脱胎した句を付けた。どうも基角は神話の筋から奔放な想像力を働かせる才能がある。芭蕉はそこまで飛躍せず、筋を自分なりに変更した話に替えることが出来る才能。その微妙な違いが以後の二人の歩む道を異にしたのであろう。なお、建御雷神は鹿島神宮の祭神であり、4年後の貞享四年には鹿島詣での旅に出て神宮に詣でて、「この松の實はへせし代や神の秋」を残している。私も平成元年芭蕉を慕ってお参りした。七尺もある直刀が宝物殿にあるが、右の十掬劔とつかるぎのの所縁のものである。

お便り広場（到着順、敬称略）

前略 冬至の本日白金葎十二月号拝受いたしました。光成様のタフぶりにびっくり。頑張っても物事すべてスムーズに進まぬ自分に呆れております。予定は皆崩れいろく邪魔が入り九十四歳はすることなすことスローに魔なつたと思っております。毎年済んでいる年賀状の表書きをやつと今頃している次第です。みち様からのお便りとゴッホのアイリスの咲くアルルの風景心とむ絵ですね。折角お買い求めですので、お手許にあるべきをありがたく頂いてしまいます。先日來二度程購読料（誌代）の件お伺いしたつもりですが、確たるご教示ないまま従来どおり二〇一八年（平成三〇年）お送り申し上げます。増額の場合はお申し越し頂きたく存じております。医者通

ひどうやらこうやら年の暮（高志）心が痛みます。ごむりなさらないで下さい。人參は皆ヒノキオの鼻に似て（みち）誰もが知るヒノキオの鼻、楽しくほっこりしました。

年末年始のご多忙ますくご健康にご留意の上新しい年をお迎えくださいますようお祈り申し上げます。白金葎誌代二〇一八年一月〜十二月6千円同封いたしました。十二月二十二日光成高志様みち様（璃子）

私の感想文が「ぎりぎり間に合った」とメールをもらったのが十二月二十一日。それから僅か二日後に、私の手許に十二月号が届いた。まるで手練の手品を見るように呆然となった。しかし、この早業の蔭にあつたはずの主宰の苦心と努力に思いが及ぶと、自然と頭が下がった。師走に入つて十一月号を、さらに追いかけて十二月号をと二冊を刊行。それだけでも驚くべきことなのに、誌上に選句評・俳窓評論纂・蕉風研究連載・報告・感想と健筆をふるうほか多数の句作発表をし、多数の受贈誌もじつに豆に読み感想・抜粋までしている。我孫子日記を見ると、その間に例会二回、吟行一回、奈良旅行、毎週の大学公開講座受講、文化祭参加、谷中散策のほか、どうやら菜園の農作業までこなしている。それも何回もの病院の入院、四日に及ぶ臥床と持病の身をかばいながらの活動なのだから、私は言葉を失うほかない。体調が悪

いから例会は欠席などと言ひ、平然と投句まで主宰の許に押しつけている自分を省みると、なんとも恥ずかしくなる。どうやら人間の出来具合が違うとしか思えない。

これまでの人生で色んな人に出会ったが、長い俗生活の中に於いて青年の如き生新な精神を保ち、失わなかった珍しい存在という印象を主宰に受けるのである。大企業でも理系専門分野で一匹狼のキャリアを通してきたので、生来の文人肌が損なわれず晩年に開花したというべきか。職業と風雅の二本道をゆく俳人がほとんどだが、主宰もそれに近くありながら、広く文雅の世界へ憧れを抱いてやまない文人気質を私は強く感じる。その核心は真の風雅の探求であり、それを連衆とともにいうことであろう。その連衆の一人に加えてもらえた幸運は、さる大学のオーブンカレッジの源氏物語講義受講で隣席に座ったことが機縁だった。しばらくは源氏物語講義の副産物のような気持ちだったが、次第に俳句に引き込まれて今や白金霞が私の関心の主たるものになっている。書くところによると、昭七さんの宮沢賢治評論やBS番組・新聞などの賢治特集に刺激を受けて、昔からの賢治への関心をとみに強めているとか。十二月号では、昭七さんの菊坂の句に在京時代の賢治を偲び、「銀河鉄道の夜」を完読、賢治の愛した多くの星々から芭蕉の天の川の句、誓子の星

恋の句集をあげ、大乘仏教の文学的表現として賢治と三島の類似性や賢治の天才的な在りようにも言及している。抱懐する関心の大きな広がり示すとともに、「白金霞」が狭い俳句のジャンルを超えて日本文学の視野も有するものであることをも告げるものである。また、連載じつに四十回に近い「芭蕉の軽み以後」は、その関心の向け方が単なる一時的な移り気によるものでなく、徹底して探求するという長期の持続心に支えられていることを語る。本居宣長の「古事記伝」は起稿から脱稿までじつに三十四年かかっている。主宰の芭蕉論もそれには及ばないまでも、氣迫において負けないで続けて欲しい。そのため臆測まじりの失礼な月旦評になったところは、なにとぞお許しを。

(1227 健二メール)

おどるあこりようてにうちわひるがへし
すなあそびするこどもらにはなふぶき
すずつけしこいぬのはしるにわすずし
たたかいのおわりきゆうじにあきのかぜ
もみじがりしついのこころいやしえず

(1216 ケータイメール 輝子)

(踊る吾子両手に団扇翻し)
(砂遊びする子供らに花吹雪)

(鈴付けし子犬の走る庭涼し)

(戦いの終り球児に秋の風)

(紅葉狩失意の心癒しえず)

以上漢字変換は編集子

賀正 いつも句会を楽しみにしています。今年もよろしくご指導願います。年末に白内障の手術しました。老いの坂を越えるのもなかなか大変です。ご健勝を祈ります。

平成三十年元旦 武者昭七

賀状添書き…忙しくて中々投句出来ませんが、今年ががんばりたいです。見捨てないで下さい。いい年でありますように祈っています(椒子)。昨年は久しぶりになつかしかったです。東京で吟行があるようでしたら又お教え下さいね。都合がよかったら出席させて下さいね(高代)。新しき年のお喜び申し上げます。御夫妻のおかげで楽しい句会を本当に有難うございます。私もいつまで続けられるか自信がありませんが、どうぞ本年もよろしくお願い申し上げます(多美子)。春立つや菰もかぶらず五十年(一茶) 手賀沼のほとりに移り住んですでに五十余年、気づけば夫婦とも共白髪の後期高齢者。孫が置いていったオキナインコの無邪気な愛嬌がなにより心の杖です。積ん読の本の山に挑戦する一方、俳句を始めてから俳書が増えて新しい本の山ができて圧迫感を覚え、俳句結社「白金葎」の会員、オープンカレッジの源氏物語

講座、インターネットの囲碁対局、総入れ歯のくせに食喰い気だけ旺盛、時に自転車で転んで青痣を作るなど、なんとか泰平の逸民の暮らしを送っています。佳き一年でありますようにお祈りします。今年もどうぞよろしく。今年も伴走するのを楽しみにしています(健二)。明けましておめでとうございます。早々に賀状を賜り恐縮しております。昨年も相変わらず俳句に明け暮れた一年でした。俳句を始めて一〇年が経ちましたが、未だに自分の目指す俳句の方向が見えてきません。このまま終わってしまうのかと焦る一方で、俳句を楽しんでいるからそれで良いかとも思っています。こんな私ですが、相変わらずのご指導をよろしく願います(半寿)。今年は三人目の孫の手伝いも少し減り農作業の時間を持つことが出来るかしらと皮算用?しています。雑草だらけの畑は恥ずかしいです。でも思いと実行は別なんです。次から次へとも思いませんか? 生じるのが人生なのですよね。強い願望とケセラセラの織りなす綾衣が風に吹かれてヒラヒラと・・・今年も気を付けます(綾女)。ありがたい鑑賞を何回もいただき、その都度どんなに励まされたか分かりません。生ける限り会心の句を一句でも二句でもと欲張っています。みちさんにも色々お世話になります。夫唱必ずしも婦随でない個性的句を、今年も又た

のしみに！（幸二）。中原道夫の「銀化」同人になりました。ささやかな目標をクリアしました（興正）。御無沙汰ばかりですみません。今ぼくが最優先しているのは9条の会の活動です。今年もどうぞよろしくね！（達哉）。寒中お見舞い申し上げます。朝は相当な寒さ、庭のバケツに汲み置きの水は一センチ厚の氷となっています。寒さからお体をお守り下さいませ。

（1.16 璃子）

前略（定例会会の訂正了解しました。）一月十九日（金）は当方ボランティアと重なりましたので、欠席投句させて頂きます。左記に控えを記しておきますのでよろしく。会費は同封しました。

（1.17 宏之助）

前略 新年句会の一句鑑賞の拙稿をお届けします。よろしくお願ひ申し上げます。只今降雪しきりです。お互い風邪転びに気をつけましょう。お大事にご健吟の程を。

（1.22 孝三）

我孫子日記

12/15	例会
12/21	野田源氏2
12/25	田
*	1/1 初詣
*2	1/3 皆来
*3	1/10 SOA 1
	1/16 野田源氏3
	1/17 SOA 2
	1/19 例会

*大型店まるでアメ横年の市

*2 電柱の間の初日が屋根の上

元朝や若き家族は洗濯干す

高志

〃

将門の社に歩き初詣

初点前日高昆布を土産とし

雉発つて驚かさるゝ初詣

神棚のタイの仏も煤払ふ

歳旦祭相手高く響きたり

*3 箱根駅伝仲良く繰り上げスタート

東に三日の日の出月西に

歌留多読む朗読調の婿の節

礼者来る成績表を携えて

礼者来る非常飲料携えて

歯固めのするめの足を割いてをり

編集後記

本誌は袋綴じなので4の倍数の頁で止めます。そのため今回も十六頁に収めるのに苦労しました。鑑賞文も冗長な部分は私の責任でカットしています。打込みの労力を減らすためお便り以外は、引き続き電子化稿をお送り下さるようお願いしています。

〃

〃

高志

〃

〃

〃

みち

〃

白金 1月号（通巻第八号）平成二十年一月二十五日発行

編集・発行人 光成高志 発行所 一七〇・一二九 我孫子市南新本二四二七

〇四一七八七―〇六八表紙の題字・加納綾女 同写真は

一月二十五日の白金と電土山